

## 研修環境の違いによる研修歯科医の学びの解明 —省察の観点からの質的アプローチ—

大 戸 敬 之

**抄録：**本研究は、研修歯科医が大学病院や外部の研修施設のそれぞれにおいて、どのような事象から学びを得ているのかについて質的に解析を行った。広島大学病院研修歯科医 35 名を対象に、研修終了時の Significant Event Analysis 口頭プレゼンテーションを実施し、その逐語録をもとに Steps for Coding and Theorization にて分析した。これにより生成された理論記述より研修歯科医が学びを得る事象についての概念を抽出した。その結果、大学病院では「指導歯科医との関係性」、「大学病院の専門性」、「自己評価による成長」、外部の研修施設では「スタッフの一員」、「他職種との関係性」、「できないことへの気付き」となった。この結果から、より効果的な学習方略の立案につながると考えられる。

**キーワード：**研修歯科医 研修施設 正統的周辺参加

### 緒 言

日本の歯科医師は、2006年4月1日以降に歯科医師免許の申請を行い、歯科医師免許を受けた者については、1年以上の臨床研修が義務付けられている<sup>1)</sup>。この臨床研修が行われる施設としては、平成26年度で歯科大学病院が33施設(12%)、その他の施設が242施設(88%)となっている。一方で、歯科医師臨床研修マッチングの結果としては、歯科大学病院が2604人(84%)、その他の施設が497人(16%)と、大多数が歯科大学病院において研修を行うことを希望している<sup>2)</sup>。医師のマッチング結果は、平成26年度で大学病院とその他の施設との割合が56.3%と43.7%で<sup>3)</sup>、歯科の状況とは大きく異なっている。歯科大学病院での研修においても、大学病院のみで研修を行うプログラムと、大学病院と外部の研修施設と組み合わせたプログラムを用意している。また診療科の選択としても、大学病院では単一診療科でのストレート方式、複数の診療科を回るローテート方式といった研修方式がとられている。大学病院では50名以上の募集定員がほとんどであり、同じく指導歯科医数もほぼ全ての施設で50名を超えている。一方で外部の研修施設である協力型施設については、施設基準として指導歯科医1人を含む、常勤歯科医師数が2人以上であることが規定されている<sup>4)</sup>。この協力型施設は、その規定と同程度の小規模の歯科診療所であることが多い。

様々な臨床研修施設において研修を行う研修歯科医は、卒後の臨床研修から続く生涯研修を歩み始めた段

階にある。生涯研修の初期の段階は、プロフェッショナルとして求められる「省察」<sup>5)</sup>に精通していない状態である。その状態の研修歯科医に対して、広島大学病院では体験を構造的に振り返るための訓練方法として Significant Event Analysis (以下 SEA) を実施している<sup>6)</sup>。SEA とは、もともと第二次世界大戦中のパイロットの失敗を分析するための構造的アプローチである Critical Incident Technique (以下 CIT) を教育に応用したものである<sup>7,8)</sup>。まず CIT とは、小グループ内で Critical incident について個人が振り返り、それをもとにグループ内でディスカッションし、今後の課題や改善策を見つけることを目的とした手法である。その一方で SEA は、臨床現場において小グループのメンバーそれぞれにとっての重大な出来事に対して、将来的な診療の質の改善につなげるために、詳細に個人が省察し、グループ内で検討を行う方法である。両者は本質的には変わらないものであるが、CIT には責任の所在の明確化という目的も存在している。SEA を実施することで、個々のもつ情報を共有することにより、メンバーの共感や暗黙知を引き出すことが可能であり、医療チームの増強や業務環境改善につながり、さらには深い省察にも繋がっていく。この深い省察は、状況を多面的に考えることができることから、高い学習効果が期待されている<sup>9)</sup>。

しかし、研修歯科医が大学病院、外部の研修施設のそれぞれで、どのような事象がより深い省察に繋がるかという報告<sup>10)</sup>はあるが、研修歯科医が省察のプロセスから得る具体的な学びについて質的にアプローチ

広島大学大学院医歯薬保健学研究科歯科医学教育学講座 (主任：小川哲次教授)

鹿児島大学医学部・歯学部附属病院歯科総合診療部 (主任：田口則宏教授)

Department of Dental Education, Graduate School of Biomedical and Health Sciences, Hiroshima University (Chief: Prof. Tetsuji Ogawa)

General Dentistry, Kagoshima University Medical and Dental Hospital (Chief: Prof. Norihiro Taguchi) 8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima City, Kagoshima 890-8544, Japan.

し、検討を行なったものは無い。質的なアプローチのメリットとして、量的なアプローチでは十分には探索できない研修歯科医の本音や背景を扱うことができる点である<sup>11)</sup>。このような質的なアプローチは歯学分野においては、歯科保存学<sup>12)</sup>や歯科衛生教育学<sup>13)</sup>、歯科医学教育学<sup>14)</sup>などの研究において実施されている。これらより、今後研修歯科医が経験すべき事象の検討や、効果的なプログラムの構築、さらには研修歯科医の成長のメカニズムを解明する一助とするため、研修歯科医が研修期間中にそれぞれの研修施設において学びを得ている事象について、省察という観点から、質的に分析を行なった。

### 対象および方法

#### ・対象

広島大学病院研修歯科医（2012～2013年）の35名を対象に、一人3分程度のSEA口頭プレゼンテーションを実施した。当院におけるSEA口頭プレゼンテーションは、院内外の各診療科で研修している研修歯科医を月に一度全員集合させ、その月にあった一番印象に残ったことを各々3分程度スピーチさせるというものである。その際、動画を撮影し、それを基に研修終了時に実施したSEA口頭プレゼンテーションの逐語録を作成した。なお、研修歯科医の内訳として、大学病院内で4つの診療科で研修を行うローテート方式の単独型研修が23名（University Hospital：以下UH群）、大学病院と外部の研修施設とを組み合わせて研修を行う管理型研修が12名（External Clinics：以下EC群）である。

#### ・分析方法

発表内容の分析には、質的分析法である、Steps for Coding and Theorization (SCAT)<sup>15)</sup>を用いた。SCATは(1)データの中の注目すべき語句、(2)それを言い換えるためのデータ外の語句、(3)それを説明するための語句、(4)そこから浮きあがるテーマ・構成概念の順に4ステップのコーディングを行い、それをもとにストーリーラインおよび理論記述の生成を行う分析手法である。35名の研修終了時のSEA口頭プレゼンテーションである35ケースについて、個々のストーリーラインおよび理論記述を得た(表1)。分析については、筆者が単独で行い、その後共同研究者2名により生成過程の解釈的・理論的妥当性を確認した。なお今回は、口頭プレゼンテーションから得られたテキストを一人ひとつのセグメントに収める形で分析を行なった。これは大谷によるオリジナルの方法<sup>15)</sup>とはやや異なっている。ひとつのセグメントに収めた場合、そのセグメント内で複数のテーマが含有されている際にコーディングが難しくなるなどのデメリットが存在することがある。しかし、今回の分析対

象は発表者ごとに発言した内容であり、テキスト量によるものや含有されているテーマごとにセグメントを分割した場合、早期の段階から分析者による内容の取捨選択のバイアスが生じてしまう可能性があり、前述のデメリットよりもバイアスを排除するメリットの方が大きいと考え、オリジナルから変えた形で分析を行なっている。

#### ・倫理的配慮

本研究は広島大学疫学研究倫理審査委員会の承認(疫-1121)を得て、動画の撮影等については研修記録の一環として行われた。研修歯科医に対しては研究代表者が臨床研修開始時に実施内容・主旨について説明を行い、同意書をもって了承を得ている。

### 結 果

SCATによる分析を行った結果、35名分の逐語録から35のストーリーラインが生成され、そこからUH群である23名からは58の理論記述、EC群である12名からは49の理論記述を得た。さらに、それぞれの理論記述に基づき、概念の抽出を行なった。それによりUH群では1.「指導歯科医との関係性」、2.「大学病院の専門性」、3.「自己評価による成長」という3種類(表2)、EC群では1.「スタッフの一人」、2.「他職種との関係性」3.「できないことへの気付き」という3種類の概念が抽出された(表3)。

### 考 察

研修歯科医のSEAのSCATから得られたストーリーラインは35名分で35個であったが、理論記述の数としてはUH群で一人あたり2.52個、EC群で4.08個と、EC群の方がより多くの理論記述が可能であった。筆者はEC群の方がより深い振り返りを行っているという報告も行なっているが<sup>16)</sup>、研修歯科医がSEAにおいて深い振り返りを行う中で、ただ事実のみを告げるのではなく、周囲の同僚へと伝えようと発表することで「厚い記述」<sup>17)</sup>となり、この厚い記述である研修歯科医の発表内容に基づいてSCATを行ったことが、EC群における理論記述の数の増加につながったと考えられる。

また、理論記述から抽出された概念として、UH群においては、「指導歯科医との関係性」があるが、理論記述自体においても多くを占めていた。特に、指導歯科医の手技や指導歯科医をロールモデルとするものが多かった。これは研修歯科医—指導歯科医関係の接触が多いということだけでなく、知識・技能を十分に兼ね備えた存在である十全参加者<sup>18)</sup>となった指導歯科医をロールモデルとして目指すことの顕れである<sup>19)</sup>。一方でEC群では「スタッフの一人」、「他職種との関係性」が抽出された。外部研修を経験した研修

表 1 SEA および SCAT の例

	テキスト	< 1 > テキスト中の注 目すべき語句	< 2 > テキスト中 の語句の言 いかえ	< 3 > 左を説明するよう な テキスト外 の概念	< 4 > テーマ・構成概念 (前後や全体の文 脈を考慮して)	< 5 > 疑問・課題
	…5つ4つ上の先生が そこで働いているんで すけれども、その人に 言われたのが、適当な CRとかかっていうのは、 僕らでも、今でもでき ると思うんですよ。根 治とか、なんもわから ずに義歯調整とか咬合 均等に当たたらいい かなってな感じとか、 時間かければなんとな くはできると思うんで すけど、けど、それで は納得行く治療とか、 完璧な治療はやっぱで きないかなって、やっ てその、CR一つにして も満たすべき条件って のは、すごい何個も あって、自分がやって たらこうはならんな、っ てのは最近思ってた、2 か月間見とってまあ やっぱり勉強しな きゃってのが、最近強 く思って…	適当な CR 今でもできる 納得行く治療 満たすべき条件 勉強しなきゃ	質を伴わ ない治療 だれでもで きる 質の伴った 治療 具備すべき 条件 継続的な勉 強の必要性	何も考えない治療 最低レベルの治療 ベストな治療 クリアすべき項目 研鑽の重要性	何も考えず質が 伴わない治療 だれでもできる 質の伴うベスト な治療 クリアすべき条 件が多い 研鑽の重要性を 実感	クリアすべき 具体的な条件 とはなんであ ろう。経験年 数などによっ て意識の違い はあるのだろ うか。  対比群で実感 について同じ ような傾向や SEA はあっ たのか。  省察的实践家 との関係は。
ストーリー ライン (現時点で言 えること)	何も考えず質が伴わない治療であれば、だれでもできるものであるが、質の伴うベストな治療を行おうとするとクリアすべき条件が多い。そのため、研鑽の重要性を実感した。					
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 質が伴わない治療であれば誰にでも可能である。</li> <li>・ 質が伴ったベストな治療のためには、クリアすべき条件が多くある。</li> <li>・ クリアすべき条件が多く有ることを知ることにより、研修歯科医は研鑽の重要性を実感する。</li> </ul>					

歯科医の場合、初期においては研修施設のスタッフとの隔絶感を覚えることがあるが、研修を重ねていくうちに、任せてもらえることの範囲の拡大などがあり、医療職集団の一員として認められるという感覚を得るようになる。これに対して、研修歯科医は喜びを感じるとともに、次への努力を行うようになってくる。これらは周辺参加者から十全参加者へと変化していく正統的周辺参加理論<sup>20)</sup>ののちのちのものである。

UH群とEC群との比較を行うと、UH群では「指導歯科医との関係性」についてのみであったが、EC群ではそれ以外の歯科衛生士、歯科技工士、歯科助手といった「他職種との関係性」についても言及するものがあつた。大学病院の方が口腔外科や口腔ケアなどで、歯科医療職以外のスタッフとも関わることもあるにもかかわらず、外部で研修した研修歯科医から他職

種の関わりについて出現している。これは、外部の歯科医院は小規模の歯科医院であるため、研修歯科医—指導歯科医・上級医間、研修歯科医—他のスタッフ、研修歯科医—患者間と密接な人との関わりが起りやすい状況にあり、関係が固定されているため、研修歯科医の参加度が高まる。一方で、大学病院には多種多様なスタッフが存在し、多数のスタッフが流動的に多数の研修歯科医を指導している状況であるため、個々の研修歯科医の参加度が低下してしまう。各専門診療科内においても小集団が複数構成される場合もあるが、日々の診療の中で、多くの研修歯科医はその場で形成された小集団を渡り歩く形となり、そこでの参加度は低いままとなる。これらから、UH群では指導歯科医との関係性を主としたと考えられる。

また、UH群では「大学病院の専門性」があげられ、

表 2 抽出された概念およびその基となった理論記述の抜粋 (UH 群)

---

1. 「指導歯科医との関係性」  
指導歯科医との共通言語を獲得することによって、説明を理解することができる。  
思いの強い患者を多く受け持つ指導歯科医の対応の仕方から学ぶ。  
指導歯科医のフォローが入る状況での研修で飛躍ができる。術者視点への転換による立場の擬似的転換が行われる。  
指導歯科医視点からの言葉によって、指導歯科医視点の受容が行われる。

2. 「大学病院の専門性」  
全身疾患を持つ様々な配慮が必要な患者と接することで、全人的な歯科医療や患者家族との関係について学ぶことができる。  
一般歯科診療が無い少し違った診療科で研修をすることで焦りが生まれるが、既に回っていた科で覚えた総合歯科分野を忘れないようにする。  
特別な対応を必要とする患者に対応していくことにより、特別な環境下での治療体験への欲求が現れる。

3. 「自己評価による成長」  
患者の行動変容を引き起こすことで、自分自身の行動変容にも繋がることから、成長を実感する。  
失敗体験の軽視や自己への過大評価のために、基本的事項の指摘を周囲から行われる。  
患者の機微を読むことができた結果から、研修したことが身になっている実感を覚える。

---

全身疾患や一般歯科治療以外の診療、障害者といった大学病院でしかほとんど見ることができない診療についてあげられていた。今後の進路と直接的に関係はなかったとしても、一般開業医ではなかなか見ることができない診療に対する重みを感じている顕れであり、一番印象に残った出来事という SEA の特徴によるものであると考えられる。

加えて、UH 群と EC 群では成長の経緯の点においても違いが出た。UH 群では「自己評価による成長」と、「成功体験」と感じた自己判断での成長の実感があつたが、一方 EC 群では「できないことへの気付き」と、失敗体験や、自分自身が指導歯科医などと比較してまだまだできていないことを自覚した上での成長であった。UH 群と EC 群における成長の経緯の違いは、外部の研修施設では指導歯科医との密接な関係からフィードバックを得やすく、気付きも多いが、大学病院でなかなか参加度が上がらず自己評価、自己成長に頼らざるをえないという点から生じていると思われる。

これらを踏まえ、より学びが起りやすい研修環境を考えた場合、外部研修を積極的に取り入れることが望まれるが、小規模の歯科医院への負担や、研修歯科医自身の希望の面から、全員を研修させるというのは不可能である。そのため、大学病院といった大規模な教育施設においても、研修歯科医が密に接し学習でき

表 3 抽出された概念およびその基となった理論記述の抜粋 (EC 群)

---

1. 「スタッフの一員」  
診療補助業務ばかりであっても、職場に参画するために必要な過程である。  
スタッフの一人としての働きを求められることにより、状況把握の重要性を実感する。  
出向先では協調性が重視され、温かな性格が求められる。

2. 「他職種との関係性」  
プロフェッショナルなスタッフをプロのアシスタントのお手本とする。  
年下のスタッフから職歴による違いからくる技量の差を実感する。  
他者との関わりの中での仕事があり、それにより自身の解釈の整理や確信をもった診断と治療を行える。

3. 「できないことへの気付き」  
自身の知識不足に起因する反発を自覚することによって、自律の意識が芽生える。  
自身の慢心に気づくことにより、失敗体験の重要性を感じる。  
持てる知識の発揮を行い、実力不足を自覚することで、スタッフの力量を感じる。  
出向先で完成時の想定とのギャップを感じることが多い。

---

る共同体を作ることが必要である。具体的には、指導歯科医—上級医（—コ・デンタルスタッフ、コ・メディカルスタッフ）—研修歯科医といったしっかりとしたチーム制を敷くことや直属の指導歯科医の他に相談役となる先輩（メンター）が研修歯科医（メンティ）をサポートするメンター・メンティ制度、指導歯科医に随伴し業務を行うシャドウイングを応用するなどの工夫を行い、研修歯科医の参加度の向上が求められる。

なお、本研究は広島大学病院の研修歯科医の SEA 口頭プレゼンテーションのみを対象としており、より結果の妥当性を高めるためにも、個々の研修歯科医へのインタビュー調査を行うことや、他施設の状況の把握を行うことが必要である。

## 結 論

本研究で、研修歯科医が大学病院や外部施設のそれぞれで学びを得ている事象には違いがあることがあきらかとなった。この結果は、研修歯科医が置かれるべき状況の理解へと繋がり、今後の歯科医師臨床研修プログラムの改善やより効果的な学習方略の立案へ有用であると考えられる。

## 謝 辞

本研究を遂行するにあたり適切なご助言とご尽力いただきました広島大学病院口腔総合診療科および鹿児島大学医学部・歯学部附属病院歯科総合診療部の皆様に厚く御礼申し上げます。また、本研究に理解を示し、ご協力を頂きました

2012～2013年度広島大学病院研修歯科医の皆様に深甚なる感謝の意を表します。

#### 利益相反の開示

本研究に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はありません。

#### 文 献

- 1) 厚生労働省医政局歯科保健課. 歯科医師臨床研修制度の概要2012年. <http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/isei/shikarinsyo/gaiyou/> (最終アクセス日2015. 3. 3).
- 2) 歯科医師臨床研修マッチング協議会. 平成26年度歯科医師臨床研修マッチングの結果2014年. [https://www.drmp.jp/14match\\_koho.pdf](https://www.drmp.jp/14match_koho.pdf) (最終アクセス日2015. 3. 3).
- 3) 医師臨床研修マッチング協議会. 平成26年度医師臨床研修マッチングの結果2014年. <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10803000-Iseikyoku-Ijika/0000062060.pdf> (最終アクセス日2015. 3. 3).
- 4) 厚生省健康政策局長. 歯科医師臨床研修施設の指定基準等について1996年. <http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/isei/shikarinsyo/hensen/shiteikijyun.html> (最終アクセス日2015. 3. 3).
- 5) Schön D.A. Educating the Reflective Practitioner. Towards a New Design for Teaching and Learning in the Professions. San Francisco : Jossey-Bass : 1987. 3-40.
- 6) 広島大学病院歯科領域卒後臨床研修委員会. 平成26年度 広島大学病院歯科医師臨床研修プログラム2014年. <http://www.hiroshimau.ac.jp/upload/19/rinsyoshika/H26program.pdf> (最終アクセス日2015. 3. 3).
- 7) Hamish J Wilson, Kathryn M S Ayers. Using significant event analysis in dental and medical education. J Dent Educ 2004 ; 68 : 446-453.
- 8) Flanagan JC. The critical incident technique. Psychol Bull 1954 ; 51 : 327-358.
- 9) 大西弘高, 錦織 宏, 藤沼康樹, 本村和久, 斉藤さやか, 北村和也, 他. Significant Event Analysis : 医師のプロフェッショナルリズム教育の一手法. 家庭医療 2008 ; 14 : 4-12.
- 10) 大林泰二, 大戸敬之, 長谷由紀子, 小川哲次. 臨床研修の中間点における研修歯科医の振り返りの様相についての検討. 広島大学歯学雑誌 2014 ; 1 : 1-5.
- 11) 大谷 尚, 無藤 隆, サトウタツヤ. 質的アプローチは研究に何をもたらすか. 質的心理学研究 2005 ; 4 : 17-28.
- 12) 加藤智崇, 杉山精一, 牧野路子, 内藤 徹. 長期メンテナンス受診患者における患者背景の質的解析. 日本歯科保存学雑誌 2014 ; 57 : 268-275.
- 13) 長谷由紀子. 歯科衛生士のプロフェッショナルリズムに関する研究. 広島大学大学院医歯薬学総合研究科修士課程 歯科学専攻 修士学位論文 2013 (未公開).
- 14) 岡 広子, ウディヤントテジョサソニコ, 小川哲次, 高田 隆. 歯学部国際交流プログラムへの研修歯科医参加の試みとその評価. 日本歯科医学教育学会雑誌 2013 ; 28 : 175-183.
- 15) 大谷 尚. 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データに適用可能な理論化の手続き. 名古屋大院教発達科研科紀要 2008 ; 54 : 27-44.
- 16) Takayuki Oto, Taiji Obayashi, Yukiko Nagatani, Hiromi Nishi, Masaru Ohara, et al. The importance of external training and training team size in clinical practice 2014 AMEE 2014, Italy : Milan ; 2014.
- 17) Greetz, C. The interpretation of cultures. New York : Basic Books : 1973. 3.
- 18) Wenger E. Communities of practice: the structure of knowledge stewarding. In: Despres C, Chauvel D, eds. Knowledge horizons: the present and the promise of knowledge management. Woburn, MA : Butterworth-Heinemann ; 2000. 205-224.
- 19) Jochemsen-van der Leeuw HG, van Dijk N, van Etten-Jamaludin FS, Wieringa-de Waard M. the attributes of the clinical trainer as a role model: a systematic review. Acad Med 2013 ; 88 : 26-34.
- 20) Wenger E, McDermott R, Snyder WM. Cultivating communities of practice. Boston : Harvard Business School Press ; 2002. 82.

#### 著者への連絡先

大戸 敬之  
〒890-8544 鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘8-35-1  
鹿児島大学医学部・歯学部附属病院 歯科総合診療部  
TEL 099-275-6049 FAX 099-275-6049  
E-mail : toto@dent.kagoshima-u.ac.jp

Analyse of learning for dental trainees on the difference of training environment  
—A qualitative approach of reflection—

Takayuki Oto

Department of Dental Education, Graduate School of Biomedical  
and Health Sciences, Hiroshima University  
General Dentistry, Kagoshima University Medical and Dental Hospital

**Abstract** : This study aimed to analyse the factors and events related to learning for dental trainees. We created transcripts of the oral presentations dental trainees had given at the Significant Event Analysis conference at Hiroshima University Hospital (n = 35) at the end of training. We analysed it qualitatively. We made some findings in terms of 'the relationship between the trainees and the advisory doctor', 'the speciality of university hospital', and more. We found that the results demonstrated the utility of external training and the importance of trainee placement. We also believe that the findings can be beneficial to the enhancement of training programs and in the planning of effective learning strategies for dental trainees.

**Key words** : dental trainee, training facility, legitimate peripheral participation